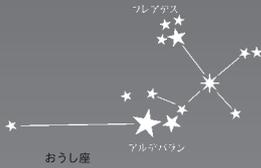


ポラリスを仰ぐ北の大地から



ダーウィンを訪ねて

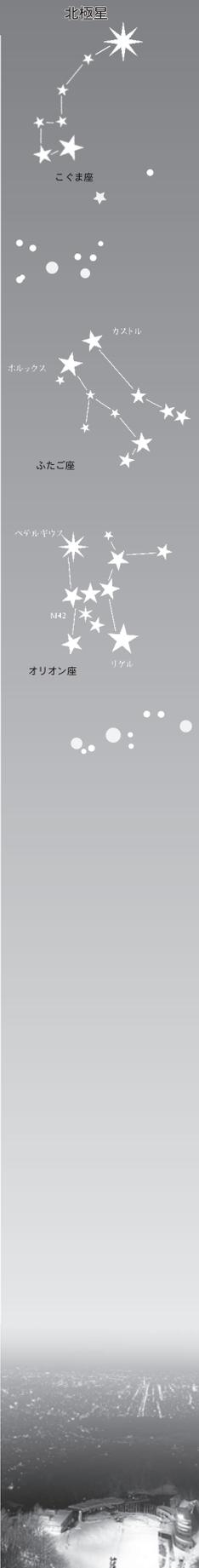
北広島医師会 会長 つしま のぶやす 対馬 伸泰

医師に興味はと聞くと旅行と答える人が多いと思われるがガラパゴスを旅した医師は稀有なのではないだろうか？ 今回私はガラパゴスを旅する機会を得たので報告したいと思う。同行者は妻と義母、妹夫婦の総勢5名。計画立案は妹夫婦である。妹夫婦は年中ダイビングをしていて世界中の海中撮影をするのが趣味であり今回はそれにつき合わされた格好だ。

ガラパゴス諸島は南米エクアドルの首都キトから西へ1,000km離れている。この距離が固有の進化を遂げた大きな要因だ。陸の97%がガラパゴス国立公園、周辺40海里がガラパゴス海洋保護区に指定されていて厳しく管理されている。諸島巡りはクルーズ船で8日間かけて各島に小型ボートで上陸し、自然や動植物に触れ合いシュノーケリングで海の中を観察する。観光には16人に1名のナチュラリストガイドが同行しなければならない。また歩く場所が決められていて踏み込んではいけない場所があるところに設定されている。また動物に触ることはもちろん2m以内に近づいてはならない。触ると人の匂いがついて親が子を認識できなくなるという。

上陸して最初に出迎えてくれるのはダーウィンが「世界で最も醜悪で不格好なトカゲ」と評したイグアナだ。アップでみると恐竜のミニチュアのような。ウミイグアナとリクイグアナがメインだが今はハーフのハイブリッドイグアナも生息している。ただしハイブリッドは繁殖能力がない。次はガラパゴス諸島の代名詞ガラパゴスゾウガメだ。最大で体長1.5m体重300kgに達する。寿命は150年。かつてスペインの海賊が乱獲し10万頭が犠牲になった。ゾウガメは飲まず食わずでも8か月生息するため海賊の食料として好都合だったという。ほかにもカツオドリ、フィンチ、シーライオン、ペンギン、フラミンゴ、アホウドリなどが生息している。どの動物も人間を全く恐れない。シーライオンが船に乗ってきたのは驚いた。

今回の旅はジュラシック・パークに迷い込んだような印象であった。ちなみにインターネットもない、テレビもない、電話は通じない。スマホはただのカメラ。多分何百年前と同じ光景なのかもしれない。



医師としての40年、電子工作との出会いと活用

渡島医師会 会長 こうせん けんぞう 光銭 健三

幼い頃から工作、特に電子工作が好きだった私は、大学生の時に日本初のパーソナルコンピュータと言われるNEC PC-8001を手に入れ、もっぱらゲームではあるがプログラミングを学んだ。しかし、そのパソコンはメモリー容量が16KBで、最近のパソコンの50万分の1程度、画像は白黒でサウンド機能はなく、BEEP音のみ。それでも自分が作ったプログラムが動いたときには感動した。

内科レジデントとして麻酔科で研修中には、教授に頼まれて統計ソフトを作成し、医師としてではなく、重宝された。消化器内科に入局してからは、某メーカーの電子内視鏡開発に協力した。電子内視鏡が製品化されてから、売り込みを兼ねて、旧ソ連のモスクワで講演したことは貴重な経験である。デジタル化された内視鏡画像を用い、自動診断を目指して画像解析にも取り組んだが、今から30年以上前のことで、処理速度が遅く一度に数枚の静止画しか保存できないという低スペックのコンピューターでは実現困難だった。

その後まもなく家庭の事情で田舎の開業医になり、30年になる。当初は診療所向けの小規模な画像ファイリングシステムを自作したり、当時は手に入りにくかった長いLANケーブルを秋葉原の専門店で買って天井裏に張り巡らしたりしていた。最近では発熱者用の第2診察室を作る際に、パソコンを増やさずKVMエクステンダーという装置を利用して他の部屋の電子カルテを操作できるようにした。久しぶりに天井裏にLANケーブルを通した。

医師になって40年余り、こうして思い出してみると、幼い頃から続いている電子工作という趣味は自分の医師としての活動にも役立っていると思う。

最近ChatGPTに興味を持ち、診療に活用できないかと模索している。

ちなみに、このまとまりのない文章の表題はChatGPTがつけたものである。